21世紀への遺産

熊本の文化財を語る

古鐘を守る。

円性寺住職
石原 照堂

午前七時になると、古鐘が響きわたり、栖本町の一日が始まります。

古鐘とは利明寺の梵鐘です。

一三九四年に造られたものとあって、歴史の重みを感じさせるその澄んだ音色は、まさに諸行無常の響きがあります。

この梵鐘は、栖本氏の奥方がお輿入れの時、川尻の善勝寺から持参されたものと伝えられています。

当時、どのような意味で梵鐘を持参されたのか分かりませんが、よほどその梵鐘に執着があったのか、あるいは、未知の地、天草へ輿入れする不安を紛らわすために、聞きなれた鐘の音を心のよりどころとされたのかも知れません。

それ以来ずっと栖本氏の菩提寺であった利明寺に設置されています。

しかし、この梵鐘も過去に何度か取りはずされたいきさつがあります。

それは、干ばつの時に、この梵鐘を川に入れれば、たちまち大雨が降るといういい伝えがあるためです。

そのいい伝えを裏付けるように、梵鐘の至る所に痛々しい傷跡があります。事実、昭和の初め頃にも梵鐘を川の中に入れたことを記憶している古老も数多くおられます。

利明寺は、栖本町を見降す山の中腹に立っています。

私たちが子供の頃は、今のように公園などはなく、お寺の境内が絶好の遊び場でした。住職から法事の土産である落雁、もち、わらずとに入れた煮しめ等をもらえるという楽しみもあって、境内は常に子供たちの社交場として賑わったものです。

最近は、子供たちの姿もなく、古鐘だけが、私たちの目を引きます。

長年、町民の生活のリズムとして、さらに心のよりどころとして役目を果たしてきた梵鐘をいつまでも守り続けていきたいと思います。

利明寺の梵鐘

利明寺は、天草郡栖本町湯舟原にあり、山号を医王山という。創建は不明であるが、中世の栖本氏（天草五人衆のひとり）の菩提寺であった。栖本氏の衰退とともにさびれていったが、天草・島原の乱後、天草の初代代官となった鈴木重成によって湯舟原に建立された天草四本寺の一つ円性寺の末寺として復興した。

利明寺にある県指定重要文化財の梵鐘は、銘文に「鎮西肥後州河尻庄宝祐山善勝寺鐘銘日」とあることから、もと熊本市川尻の善勝寺にあったものを移したものといわれている。

善勝寺は、寒巌義尹の弟子通玄の創建による大慈寺の末寺である。

梵鐘は、全高一メートルあり、製作については銘文に「応永念六甲戌年十一月九日」とある。

心のふるさと 民話とわたし

米噛石由来

●感想文
玉名市立築山小学校
6年
中尾由布子さん

●感想画
6年
藤本 ゆきさん

私は、山男は今でも生きていると信じています。どうしてかというと、村人のために、自分もやせおとろえて死にそうなのに、必死の思いで龍神様の所へお願いに行ったんだから、龍神様もきっと分かって下さったと思うからです。

ところで藤兵衛さんの事をごかいしたまま山男が龍神様の所へ行ったらどうだったでしょうか。きっと雨は降らずに、山男は死んでいたでしょう。村の顔役や、その他の人が、山男の言う事を信じ、山男を信じて行動したから、築地村も救われたのだと思います。また、山男もおにぎりを食べてしまったのでこんな事になってしまったのではないかと思ったから行く気になったのかも知れません。

村の人全員が力を合わせれば、どんな事でもできるという事じゃないかと思います。

「米噛石由来」あらまし

玉名市の築地というところに「米噛石」といって、しめ縄が張られ、米の神様として崇め尊ばれた岩がある。

今から何百年も昔、この岩の近くに山男が住んでいた。以前はずっと奥の龍神の森で、龍神様にお仕えしていたのだが、あまりに山を荒すので、追い出されてしまったのだ。大食いの山男は、常食の木の実がなくなると、闇夜に村へ下っては、農作物を食いあさった。

ある月夜の晩、また腹をすかして山を降りる途中で、二つの大きなにぎり飯のった岩に出くわした。実はこのにぎり飯、村人が豊年を祈願して、米の神様に毎朝お供えしているものだった。これを知った山男、幸いとばかりに、毎晩このにぎり飯にありつくのを楽しみにするようになった。

ところが、この村を何十年ぶりという大ひでりが襲い、農作物は大打撃を被った。お供えのにぎり飯もこの影響をうけ、日に日に小さくなり、遂には絶えてしまった。山男は、ほとほと困った。何にも食い物が見つからない。このままでは飢え死にしてしまう。そこでふと思いついたのが、正直で働き者の藤兵衛さんの家。台所の格子戸から中をうかがうと、意外や意外、白飯と生玉子を食べているではないか。

しかしこれは山男の大きなまちがいだった。ようく調べて見ると、おからとあわ飯であった。村人たちの飢え苦しんでいるのをしみじみと知らされた山男は、自分の身勝手さを反省した。そうだ、龍神様にお願いして雨を降らしていただこう。すでにやせ衰えた山男だったが、村人たちへの恩返しにと、身を捨てる思いで山へ入っていった。切なる願いがかなったのか、待望の雨が降り始めた。しかしその後、山男の姿を見た者はいない。ただ、豊作祭りに供えられた大きなにぎり飯だけは、翌朝やっぱりなくなっていた。

「米神様」がいつの間にやら「米噛石」と言われるようになったが、この村では、米を食うことを「米を噛む」と言っていたためだという。